

## 漂流ばなし

梶川 忠成写

資料校正・編修 鶴野博文  
(会員佐伯市田の浦)

## はじめに

この元の資料（提供者は会員の並河正明氏）では「漂流棄奈志」という題がついており、佐藤巧氏がすでに「豊後国海部郡柏江の水夫安五郎の航海と漂流」という副題を加えて資料を解読・研究の成果をまとめられています。しかし事件を裏付ける資料がなく、他の「漂流記」を引用した「戯書」であろうと発表を控えてきました。

鎖国時代国外へ行った者は、理由の如何を問わず罪人として帰国の際、「口書」（事情聴取の調書）をとられますが、本書はその写しであると「まえがき」に記されています。事件の真偽は別にしても、内容は当時の漂流事情をよく伝えており、読み物としても面白いので現代語訳部分を校正、多少の解説を追加、読み易さを心がけ再編集しお目にかかる次第です。

## 時代的背景その他

この柏江（現佐伯市）の安五郎の遭難した一八四六年（弘化三年）頃は、アメリカ捕鯨産業の全盛時代にあたり、安五郎のように日本近海の高難事故者が捕鯨船に救助されるケースが増えています。

そこでこの資料理解の補助として、中浜万次郎（＝ジヨン万次郎）と浜田彦蔵（＝アメリカ彦蔵）らの伝記等も参考にしました。先ずは、遭難の年から、

一八四一年一月＝万次郎、十四歳、8 mの釣り船、5

人乗り、土佐湾沖より漂流8日、それより

無人島（鳥島）生活5ヶ月、死者なし。滞

米10年、3年以上の学校教育を受ける。

一八四六年十一月＝安五郎（年不詳）千七百石積、17

人乗り、紀州沖、漂流5ヶ月13人死亡。約

60日、米人と生活、滞米は30日。

一八五〇年十月＝彦蔵、十三歳、熊野灘沖、千六百石

積、16人乗り、漂流50日、全員救助。滞米

9年、学校教育も受ける。

ところで安五郎は何歳だったかについて過酷な条件中、十七人のうち四人の生き残りに入っているので断然若く、別の件で漂流十二人中ただ一人生存の水夫が十九歳だった例などから、二十歳前後だったと考えられます。

### まえがき（原文）

御預所豊後国海部郡柏江村、山伏龍法院三男水夫安五

郎漂流し異国船に助けられ候一件の写し。  
但し此の外色々之有り候え共、之を略し口書之所計、之を写し候者也。

### 本文

一天保十四年（一八四三）十二月八日、御私領大江灘永蔵の船水夫に雇われ登坂（大坂）、同年中、大坂間部伊右衛門親方に罷り立ち同人船え雇われ、翌辰年（一八四四年）佐竹領秋田へ下り米を積み、夫れより松前領え罷り越し、右米を売払い、夫れより松前場所下りいたし、〔蝦夷キリ（＝涯）ノ事、ニムロ（＝根室）ト言う場所〕同所ニテ昆布・丹志んを積込、播州兵庫え着き、夫れより又々同所にて綿を積み秋田へ下り、同年内同所に罷有り、翌巳年（一八四五）松前領え下り干鯛を積み、長州下関え下り同所ニテ商内いたし又候、松前領え下り鮭を積み、夫れより東を廻り江戸深川増本金丞右衛門方へ着致し候節者巳ノ十一月。同人方ニ越年、翌午年（一八四六）春、大坂え空船にて登り同所にて市嶋治郎吉船二雇われ、越後え下り候節は四月、同所にて米を積み松前へ下り、スナシリ（＝国後）と申す場所で鱒と申す魚を

積み越後之新潟へ帰り、同所濁川新田の米を積み

(新発田御領所にお成之事) 江戸深川増本金右衛門方に着

いたし候節者六月下旬、夫れより空船にて仙臺(台)

寒沢と申す処へ着、同所御掛米を積み(御代官所) 又候

江戸へ着き、夫より松前へ下り(此所は蝦夷のロッホウ、

松前より三百里下ル)

此海上都而霧にて一向物の有不分誠に凄き場所にて只

波色のみ見てハ乗り通し候 処に御座候。至つて波荒く

碇をおろす事も伝馬乗事も叶わぬ海上に候 間、地方近

く乗り付候て直々碇綱を持ち海上に飛入、ココヨリ凡そ

五、六町程もおよ起岩に登り、右綱にて船をつなぎ候也。

大概の水夫此の業をする者少シ。右の業出来兼ね候船之

着き候節は蝦夷人へ合図いたすと岸より蝦夷人およぎ付、

綱を受取又々泳ぎ帰り岩につなく。

此賃へ船又は遠近により十五両、二十両ほども取り候由。

安五郎 乗組候船は何連も達者のもの斗にて蝦夷人雇

候事無し由。

又蝦夷、濱にて鮭を縄に指し居るは漁人の仕事之よし。

然るを大熊是を真似て指し候得共、縄の末留めず有ゆえ

皆落て仕舞ふよし。

此所は仙臺御領所御掛米積出候節は後之島津  
守前御座候是持御物上件御座候人  
御座候事  
一 天保十四年十一月三日松前大川御座候松水  
守前御座候同年中大阪御座候御座候身有御  
座候事  
二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
二十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
三十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
四十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
五十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
六十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
七十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
八十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十一 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十二 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十三 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十四 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十五 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十六 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十七 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十八 松前大川御座候御座候身有御座候事  
九十九 松前大川御座候御座候身有御座候事  
一百 松前大川御座候御座候身有御座候事

「漂流ばなし」原文冒頭部分

此外、蝦夷にて種々めづらしき事之有候へども略す。同所より魚油トメ糟を積み、江戸へ着候節は午（二八四六）ノ九月、右船構え（修繕）相成候間……

〔解説一〕

以上が遭難する前までの安五郎の経歴ですが船主は二人替わつて、三人目（竹富熊吉）の持船「権現丸」（二七〇〇石積）で遭難、漂流することになります。

また、安五郎の航海で頻繁に出てくる松前（藩）は、北海道にある唯一の藩で、藩祖松前慶広が秀吉次いで家康に巧妙に取り入り蝦夷地の交易権を独占し彼の地の豊かな生産物をコントロールすることで藩の財政を賄つており、幕末崇広は無高ながら（米ができないので）三万石、従五位下、伊豆守、しかも老中にまで昇進。

因みに、文久二年佐伯藩十一代高泰隠居、十二代高謙家督の際、「御名代松前伊豆守様御直々の御意を蒙り……」などの文言があり、たいへん世話になっています。これらはアイヌからの収奪や場所請負人からの運上金収入が背後にあることは安五郎の東廻り、西廻りの往復の積み荷にも現れており「浦で持つ」佐伯の殿様よりもはるか

にスケールの大きい浦殿様だったようです。

〔本文〕

（重複部分）右船構え（修繕）相成候間、それより肥前、竹富熊吉船に雇われ、同年（一八四六年〓弘化三年）

十月六日江戸出帆。夫れより同

十日浦賀（船改め）を出帆、志州（志摩）え登り

二十七日、八日之頃濱島と云う場所へ着。同所二テ和布八

反帆買入れ、同所へ十一月九日迄逗留。

十日（十一月）紀州熊野大島と云う所へ着いたし候得共、

日和之無く十日斗逗留。それより

二十一日紀州寸サビ（スサミ〓周参見）ト申す所え入、

其夜八ツ時（午前二時）頃同所出帆。

二十二日偏以の鼻え乗り出候処、西風東風糺合、同日七

ツ半（午前四時）頃大風に相成候間、乗戻度く

候へども余の船を先へ入れさせ、跡にて湊へ入

らんと猶予致し候も餘の船は六、七百石位の船

ゆへ先へ湊へ入候へども、熊吉船は権現丸ト申

し千七百石積故、兎や角する内、船は段々沖へ

と出て其夜四ツ時（午後十時）頃猶以大風二

相成、帆を巻くは叶わず、流れ次第にいたし居候処、又々西北風に替わり、ますます大風二相成申候。日々西北風強く吹き、次第々二流れ行き

(十一月) 二十六日之頃

一ツの大嶋近く着き候間、大ひニ喜び皆々嶋へはせ揚らんと思ひ候へども、ますます風強く自由ニ相成らず。

扱さて此この嶋の様子を見るに大半人家等一向之無これく、日本なにとぞにて白鳥といふやうなる鳥はかり計はかり嶋一圓に相見え申候。

何卒此嶋に揚がり見候半せうらわんと伝馬お路ちし候へば忽ち打ちこわし、嶋へ揚がるをも不叶かをわす、一同あき連て、それより帆柱を切り捨て、碇をも切りはなし、船中之者一同髪を切

捨、一信不乱に神佛をいのり候ばかり。

夫れよりますます西北風強く段々と流連出れし候。

船中此節に至り貯たくわえの米、人数拾七人に米六俵、夫それと、あら免あつめ(荒布あつめ||食用海藻) 八百石積候斗ばかりに御座候。此の節拾七人にて一日米三升づつ炊き申候。

猶以て船は辰巳(南東)へと流れ行き候所は、最早極

月ならんと覚え候時節に至も暖ひどよみのく、単物ひとつにても夜中汗あせつき候程の海上にて御座候。



此こ処四方を眺め候処、一向に山も見えず、日夜くじら又は鯨のミ汐を吹く音斗ばかり聞こえ、眼に障るものハ波の色斗ばかり。

折節乙鳥の渡るを見、或いは船の偏へりなどへ留り候も之これ無これく候。

矢張り風強く流れ行き候間、船中益々神仏を祈はかりる斗ばかり。誠まことに身の毛もよだつ斗ばかりおそろしき儀に御座候。

此処迄、海上凡その里数日本より一万里程、辰巳(南東)之方へ流候と覚え候。

此処にて正月初旬迄漂い居り候処、もはや貯米塩噌（塩と味噌）とも食尽し、その上船中水呑み尽し連も日本へ帰国いたし候をバ勿論之事故、責めて異国にても宜敷国に漂着いたし度思ひ只、本うぜんとして居ばかり。

夫より少し南風に替り子丑（北東）の方と覚へ流れ候処、正月十五日ころ、朝五ツ頃とおぼへ、船より一町程先に当り、凡そ十五間四方位海面光り渡り候間、何事ならんと海面を見詰居候処、凡そ三、四尺程も之有らんとおもふ蓬菜の亀浮かび出で候間、暫々能く見候、絵二書き候通りいかにも美しく、夫より追々船の側近く迄歩帰来たり、良く々半時計り船に沿い相見え候。



神殿に描かれた亀の図  
（本匠村三股・白山神社の北壁面）  
中国の伝説に見える瑞獣で、麒麟・  
龍・亀・鳳凰を四靈と呼んでいる。  
普通の亀とは異なって耳があり、  
房毛のような尾が特徴。日本では  
亀を長寿の象徴とし、海神の使者  
として信仰された。（大百科辞典）

いかにも面は頗る龍の如く耳あり尾は翼を引きたる如く甲は光り輝き誠二言語に述べ難きほど美しきなり。是も全く神仏の傳ならんと、ますます信心いたし居候。

然る処、船中食い物はもちろん、水一滴も之無候間、其日の四ツ時頃、甲州身延山（日蓮宗総本山）を祈り淨雨之有候様、志きりに念じ候処、直に其日の九ツ（正午）頃、一天快晴の処、船の上計にわかにか黒雲覆ひ大雨頻りに降り候。誠に有難き次第、又不審とも云うべき候。

猶又、漂流之内十日々ニテ必ず白き鳥船上を飛ぶは不思議なり。鷺位の白き鳥ニテ尾長く幣之如く相見え候。是全く金比羅之利生とおぼえ、猶更信心致し候。

此節益々南風ニテ子丑（北東）の方へ漂流、然る所水は沢山二相なり候へども食物無之故、和布（わかめ）をばかり居候間、船中の者共残らず飢え二勞れ追々打臥し、既二正月上旬より子丑（北東）をさし、漂流の里数五千里位と相覚え候。

二月中旬頃迄船中拾三人死失申候。是迄南之果て暖国ニ漂流いたし居候所、俄二北の果てニ至り、齒の根も合わず程の寒国ニ流され候間、ばたばたと死失候事と相覚え候。

残りの四人の者共も勞れ果て、口もきけず、眼も見えず、耳も聞こえず、船中には枕を並べ十三人、人間の干物のやうに瘦死二倒れ居候を見て居る心の内、我もとてあのやうに死すものと、死を待斗なりと思ふより外なし。

〔解説二〕

以上が安五郎遭難部分ですが、史実に忠実な、作家吉村昭（本年七月死亡）の「アメリカ彦蔵」では、彼が十三才で炊事係（＝炊）として乗船した千六百石積、十六人乗り「永力丸」の遭難の場面にも共通点があります。

（遭難発生順序により）

- ① 神仏の加護を祈る。身延山、金比羅宮、伊勢神宮など「板子一枚下は地獄」の船乗りの信仰は厚い。
- ② 「刎荷」船主の大切な積荷だが乗組員の生命が危険の際は海に捨てる事が認められている。

- ③ 帆柱を切り倒す。舵はすでに壊れており、直径三尺（永力丸）もある帆柱が強風と荒波に翻弄され船がバランスを失い覆没する危険を防ぐため。

- ④ 以上、帆も舵も失った漂流船を「坊主船」という。
- この後、主として漂流期間と食料や水の貯えなどによ

り、生存率が左右されますが、彦蔵の船は、米百六十俵を積み、漂流五十日（全員救助）、ほぼおなじ大きさの、安五郎の船は、米六俵で五ヶ月漂流ですので、生存者わずかに四人は当然の結果でしょう。

（以下次号へ）

